

## ロシアにおける日本語教育のあけぼの：ロシアの東方政策から考える

東出, 朋  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/27304>

---

出版情報：比較社会文化研究. 34, pp. 49-56, 2013-09-09. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：

# ロシアにおける日本語教育のあけぼの

—ロシアの東方政策から考える—

ヒガシ デ トモ  
東 出 朋

## 0. はじめに

海外における日本語研究の歴史(日本語研究史)は長い。早くは朝鮮半島や中国大陸との交流を通じて日本語は研究されてきた。西洋人による日本語研究について言えば、16世紀中頃から布教のためにやってきたキリシタン宣教師によるものが最初である。彼らポルトガル人を初めとしてオランダ人、アメリカ人(例えばロドリゲスやホフマン、ヘボン)によって価値ある研究が多くなされてきたが、ロシア人の役割も決して小さくない(B.M.A 1988、杉本1999, 2008)。実はロシアにおける日本語研究の歴史は古く、またそのいきさつも歴史の偶然を多分に含む興味深いものである。そして、日本語研究史、日本語教育史両分野において特別な意味をもっている。なぜなら、世界で初めての海外における公立日本語学校が設立され、そしてそこでの日本語教育を担ったのが日本人の漂着民であったからだ。一重にこの点から、この時期のロシアの日本語教育は、日本語教育史において特筆すべき出来事として受け止められている。実際に多くの日本語教育通史の記述には、デンベイ、そしてゴンザとソーザに関する記述がみられる(多仁2006、関1997, 2005)。しかしその取扱いは、ただ時系列的に取り上げられていたり、日本側の事情—江戸時代の鎖国体制の中で、漂着という大いなる偶然によってロシアに日本語がもたらされた、という日本側からの見方—を説明しつつ、事実関係を追うものが多いと言わざるを得ない(同上)。ロシア側の事情—当時のロシアがどのような事情で、いかに日本語を必要とするに至ったかという、ロシアの国内外情勢—に触れて考察した研究は、管見の限り見当たらない。

日本語教育史の本質的特徴として、日本側の視点から記述されるのは当然ともいえる。それでも、漂着民を外国語教師(インフォーマント)として利用するに至るまでには、ロシアの側にはなんらかの意図があり、つまりそのような歴史的背景こそが、ロシアにおける日本語教育の実情により深く迫る鍵となると考える。したがって、当時のロシアの歴史的背景を踏まえながら日本語教

育初期を捉え、日本人漂着民がどのような役割を果たしたのかを考えることが本稿の目的である。

まず第一節では、日本人のロシアへの漂着の歴史と、デンベイ、ゴンザ及びソーザ、そして大黒屋光太夫らの業績を取り上げ、その特徴について考察する。第二節では、彼らが漂着してきた時期のロシアの国内外事情を記して、ロシア側の意図を探る。最後に、日本人漂着民が果たした役割について考える。

## 1. 日本人の漂着の歴史と彼らの業績

日本人<sup>1</sup>はどのようにしてロシアに現れたのだろうか。それは専ら、商船・漁船が嵐によって難破、漂流し、命からがら漂着した先で運よくロシア人に保護された<sup>2</sup>結果による。そして、記録に残る限り、日本人とロシア人が初めて出会ったのは17世紀末、カムチャッカ半島でのことである。ロシア側の記録によると、この日本人は名をデンベイという。この節では、最初の漂着民デンベイから18世紀初頭まで<sup>3</sup>、ロシア<sup>4</sup>における日本語教育初期の人々について、漂着の歴史、そして彼らの業績を簡略にまとめる。尚、この時期の漂着民らの業績、その内容については村山(1963)及び村山(1965)に非常に詳しく、この節の記述もそれらによるところが多い。

### 1. 1 デンベイ

デンベイは1696年、大阪から江戸に向かう商船に乗り込んだが、嵐に遭いシベリア東部のカムチャッカ半島南端に漂着した。他の者は原住民の襲撃を受け死亡、唯一生き残ったデンベイは現地民に囚われていた。折しも領土拡大真ただ中<sup>5</sup>のロシアにおいて、デンベイは当地を周回していたコサック隊<sup>6</sup>アトラソフ<sup>7</sup>に見つけれ、ペテルブルクへ連れて行かれた。1702年、ピョートル一世に謁したデンベイは、国費による生活保証を得、ロシア語学習が開始された。その後のデンベイの記録は残っていない。

## 1. 2 ゴンザとソーザ

デンベイの後に来た日本人として、カムチャッカに漂着後、ヤクーツクを経て1714年にペテルブルクに連れて来られたサニマがいる。デンベイの助手になった。サニマ<sup>8</sup>についての詳細はほとんど残っていない。

サニマのあと、日本語方言研究において重要な資料を提供したゴンザとソーザが現れる。彼らは1729年、小型商船で大阪に向けて鹿児島(薩摩)を出発したが、途中で暴風雨に遭いカムチャッカ半島に漂着した。嵐、長い漂流、コサックの襲撃を経て生き残ったのはソーザとゴンザ<sup>9</sup>のみで、彼らはコサック隊に連れられてペテルブルクへ送られる。1734年、女帝アンナ・イヴァノブナに謁見し、生活を約束され、政府での仕事—ペテルブルクのアカデミー付属日本語学校で軍人らへの日本語を指導する仕事—が与えられた。翌年にソーザは没するが、若かったゴンザはロシア語の習得が早く、文法書<sup>10</sup>を記し、翻訳を残した。1738年、アカデミーのアンドレイ・ボグダーノフの協力を得て、初めての露日辞典である『新スラヴ・日本語辞典』を著した。ソーザの日本語は薩摩方言であったことから、この辞書は「露日」というよりロシア語と薩摩語の辞書といえる。

## 1. 3 竹内徳兵衛の部下たち

南部藩士の竹内徳兵衛一行<sup>11</sup>は1745年、千島列島オネコン島に漂着した。漂着した9名のうち、5名がペテルブルグで日本語教師になったが、ペテルブルクの日本語学校がイルクーツクへ移転し、総勢7名でイルクーツク航海学校付属・日本語学校で日本語を教えた。その中で、「さすのけ」といわれる者の息子、アンドレイ・タターリノフは『レクシコン』という露日辞典を作っている。彼らの日本語は、北奥・下北半島方言である。イルクーツクの日本語学校では日本語の通訳を育て続けた。その6年後の1761年のある記録には、日本人教師7名、学生15名とある。

## 1. 4 大黒屋光太夫ら

大黒屋光太夫の数奇な一生は小説の題材<sup>12</sup>として数多く取り上げられ、知る人も多い。大黒屋光太夫を船頭とする船<sup>13</sup>は1782年、三重・白子を出港し江戸へ向かったが、途中暴風雨に遭いアリューシャン列島のアムチトカという小島に漂着する。その後数々の困難、長い苦難の時を経てペテルブルクに辿り着く。その間、既存の露和辞書の改定作業に取り組んだ<sup>14</sup>り、当時の日本(江戸)の実情、つまり地理や金山・銀山の所在、政治、軍備、宗教、風俗、生業等あらゆることについて報告書を作成する協力を行った。動植物学者キリル・ラックスマン<sup>15</sup>

は光太夫と親交を結び、彼の尽力によりエカテリーナ二世に拝謁する。当時のロシアの対外政策、つまり極東開発及び日本との通商締結という目的、また日本への帰国を強く望む光太夫らの意向、そしてシベリアや極東の動植物の生態研究及び北方探検というラックスマンの実益、これら三方の思惑が合致し、光太夫の帰国は許可される運びとなった。1792年、大黒屋光太夫と磯吉・小市の三人はオホーツクを出港し、小市は根室で故郷を目前に病死するものの二人は無事江戸に到着し、時の将軍家斉<sup>16</sup>へも謁見した。外国を知っている数少ない人間だったため自由な行動は許されず、江戸の一角に住居<sup>17</sup>をあてがわれ、禄(生活費)が支給<sup>18</sup>された。彼らは帰国後、蘭学者桂川甫周<sup>19</sup>らとともにロシアについての情報を数多く報告した。

大黒屋光太夫の船で漂着した者の中には、ロシアに留まり<sup>20</sup>、日本語を教えた者もいる。新蔵と庄蔵である。彼らは1791年からイルクーツクの日本語学校で日本語を教え始めた。新蔵は年齢も若くロシア語を早く習得したようで、日本の本を翻訳したり、『日本および日本の貿易について』というロシア語の著書も残した。彼らの話した日本語は畿内・伊勢方言である。

## 1. 5 その後の漂着民

その後の漂着民は仙台出身の善六達である。彼らは石巻から江戸へ向かったが、嵐によりアリューシャン列島に漂着した後、それまでの漂着民同様イルクーツクの日本語学校での日本語指導の任についた。善六が話したのは南奥・仙台方言である。新蔵・庄蔵の死後は善六一人で日本語学校を支えたが、善六も死亡し、1816年には学校が閉鎖された。次にロシアで日本語教育が再開されるのは、ペテルブルク大学東洋学部に日本語講座が開設される1870年を待たねばならない。このように、ロシアにおける日本語教育の初期—デンベイから善六まで—を区切ることが出来る。

## 1. 6 漂流民らについての考察

最後に、漂着民がどのような日本人達であったかについて考えてみたい。

まず、彼らの話した日本語についてである。江戸時代の士農工商の身分制度からして、漂着民の中でも漁民や単なる船乗りだった者は、高度な教育を受けていたとは思えない。当然彼らが使う日本語も、武家詞や町人詞ではなく、下層の民が用いる地域・職業方言であった。実際、ゴンザによる辞典は薩摩方言であることが判明しているし、村山(1965)によると、漂着民達の話した日本語、つまり教えた日本語はそれぞれ薩摩方言、北奥方言、

畿内方言、南奥方言であった。ゴンザから薩摩方言を学んだロシア人と、下北半島方言を話す徳兵衛の配下ら漂流民が出会った時の驚きは想像を超えるものであったろう。彼らは大して学のないものであったと言っても過言ではなく、それが幸いして、現在の貴重な日本方言研究の資料となっている。ボグダーノフと共に辞書を作ったゴンザは、漂着した時点で約10歳であることを考えると、漢字もあまり知らなかったにちがいない。しかし、ロシア語を堪能に操るまでになったことから、ゴンザの学習能力が高かったことは事実であろう。ゴンザの露和辞典は薩摩方言の、レクシコンは東北方言の資料として現在の研究に利用されている。彼らがどのように日本語を教えたのかは分からない。ただ、現在広く行われている日本語教育を参考にして考えると、彼ら漂着民は、教師というよりインフォーマントとしての役割を担ったと言ったほうが正しいだろう。

次の疑問として、漂流民はなぜ故郷へ帰らなかった(帰れなかった)のだろうか。この疑問には二方向から考えることができる。

一つ目は、宗教的観点である。漂着民の多くは、ロシア正教に改宗し(ロシア名を得て帰化した)、現地で妻を娶り子をもうけ家庭を築いた(村山1965)。当時の日本では、豊臣秀吉に始まり17世紀前半の江戸時代に特に強化された、いわゆる「キリスト教禁止令」によって、国内では徹底した禁教政策が敷かれていた。したがって帰化しキリシタンとなった者が日本へ帰ることができないのは当然であった。漂流民達は、帰国出来ないことを分かった上で入信したのである。

二つ目に、ロシアの事情から推察できる。漂着民が帰国するための経費、財政的問題である。漂着民が自分で工面するのはもちろん不可能であり、また、政府がわざわざ予算を割いてまで、勝手に流れ着いてきた人を親切にも費用を負担して返す義理はないといえる。むしろ、日本語の通訳を養成するという目的に利用する手はないと考え、様々な仕事を与えたと推察するのが自然だろう。

唯一帰国を果たしたのが、有名な大黒屋光太夫である。漂着民の多くが下層階級であったと予想される一方で、光太夫だけは、大商人<sup>21</sup>としてかなり広範囲な知識と教養を身につけており、知識人<sup>22</sup>であったと思われる<sup>23</sup>。商人らしい鋭い観察眼、そして旺盛な知識欲こそが、光太夫にロシアで生き延びることを可能にしたし、そのような人物であったからこそ、逆にロシアで得た様々な情報を日本に持ち帰ることが出来たのだろう。この苦難の旅路の中で、光太夫はロシアの膨張力に危機感を感じるとともに、ロシアという異国で強く故郷、日本

というものを意識し、愛国心が芽生えてきた可能性は大いにありうる。だからこそ光太夫だけは洗礼を受けなかった。ロシア人になることを拒否したのである。商人として確立したモラルと自己アイデンティティがあったがゆえに、異国においてぶれずに生き延び、帰国を果たせたのだと考える。

## 2. 同時代のロシアの状況

### 2.1 領土拡大―「東進」

現在のロシアの広大な領土は、ドニエプル川中流に位置し、商業交易都市であったキエフ<sup>24</sup>を中核とするキエフ・ルーシ<sup>25</sup>に始まったとされている。キエフ・ルーシは、大陸に幾本も南北に流れる大河を少しずつ越え、イワン四世<sup>26</sup>による異教徒のカザン・ハン国及びアストラ・ハン国の征服によりヴォルガ川以東へ進出した。ゴールドラッシュならぬ毛皮ラッシュによりロシアはさらに東進し、ヴォルガ川、ウラル山脈、大森林地帯のシベリアへと進んでいった。シベリアは黒テン、ミンク、狐等、ヨーロッパにおいて高値で売買される毛皮獣の宝庫<sup>27</sup>であった。東へ東へと進むうちに、とうとう東端のカムチャッカ半島までやってきたのは17世紀の終わりである。ちなみに、この時期の稀有な出会いがアトラソフとデンペイである。この広大な領土の獲得―東進―は、国家的計画というよりはむしろ、個々人の投機的欲望の結果として生じたと言える。

また、ロシアはその地理的脆弱性として、海洋との接触部分が非常に限られている点が挙げられる。したがってロシアは不凍港を求めて南進していった。ピョートル一世は17世紀末、まずアゾフ遠征によってアゾフ海を得、18世紀初めにはスウェーデンとのバルト海をめぐる戦争(北方戦争)に勝ちバルト海への出口を確保する。そしてその後、1828年の露土戦争(ロシアの完全勝利)を受けて、1833年には黒海の制海権を握るに至った<sup>28</sup>。つまり、南進は国家戦略によるものである。

このような東進と南進の2つのベクトルが、現在に至る広大な領土を導いた。特に「東進」という歴史的背景の中で、カムチャッカ、ベーリング海峡、千島・樺太、そして日本へと視点が移動してくるのである。したがってロシアが日本に興味を持つのは当然の流れであった。また、日本との通商を求めるために日本語の通訳を養成する事も、必然であったと考える。

### 2.2 アカデミー創設と日本語学校の関係

ロマノフ朝ロシアは他のヨーロッパ王朝と同じく、外国との姻戚関係で成り立っており、また多くの外国人が

居住していた。そのためロシアにおいては、ロシア人知識人及び専門家を養成するより、外国人を連れてきて雇う方法が、外国の知の受容の方法として古くからとられてきた背景がある。ピョートル一世<sup>29</sup>も確かに多くのお雇い外国人を招いたが、彼の特色は、ロシア国内において自分たちで外来の知を伝達、加工するシステム構築に着手したことであった。

ピョートル一世は17世紀末、ヨーロッパへ大使節団を派遣した。自らも偽名を用いて使節の一員となり、ヨーロッパ各地で最新の造船技術、医療技術、軍事や重・軽工業の工場を見学し、物品を収集した。帰国後の改革は、あらゆる分野において新しい外来の知識を備えた新しい人間を必要としたため、造船工や鋳山技師、海軍将校や水兵、測地学者や航海士、医師など、それまでいなかった専門家がピョートル一世の教育政策によって養成されていった。こうして各種専門教育機関の設立が進められ、1724年、その一環としてアカデミーが創立されたのである。研究機関、教育機関の両方の機能を備えたこのアカデミーでは、外国から大勢の学者が招かれ、様々な学問が研究された。ゴンザとソーザが所属した日本語学校は、まさにこのような歴史的背景のもと作られたアカデミーの、その一部だった。その後の1754年、イルクーツク航海学校の付設校として日本語教育が続けられた。

ちなみに、世界で初めての日本語学校創設、という点については幾つかの説がある。1705年にピョートル一世によって開設された日本語学校が海外における世界最初の公立日本語学校という説を取り上げるものもある(多仁2006、関1997)。しかし、これは現在ではロシアの研究者たちによって否定され、1736年ペテルブルグの科学アカデミーに設置されたのが正しいという説を取り上げる(村山1963、B.M.A1988)ものもある。また1715年の海軍兵学校創設と同時に日本語教室が開かれたのではないか、という意見(杉本1999)もある。

### 2. 3 ピョートル一世の軍制改革と日本語教育

軍制改革と正書法の制定には実は関連がある。ピョートル一世はいわゆる「富国強兵」策をとり、様々な改革を行った。その中でも軍制改革は大きな課題であった。強く大きな軍隊を作り上げるためには、武器や戦術の研究はもちろんであるが、兵士そのものの訓練も重要である。つまり、従来貴族の子弟らが独占していた貴族的職業軍人の軍隊ではなく、広く民衆や農奴を兵として集め、軍を拡大強化<sup>30</sup>する必要があった。古くから貴族や軍人ら上流階級は日常的にフランス語を話し、フランス語で戦っていたが、軍制改革に伴って兵士の出自が多様

化し、庶民、農民が話す下流言語と思われていたロシア語で軍を指揮する必要が生じた。また、多様な方言形を含むロシア語ではなく、戦場でも正確・俊敏に意志疎通可能な、全ての人が共通に理解・使用することが出来るロシア語を制定し広める必要性があった。ロシア語の標準化並びに正書法の制定は、富国強兵策から生じた必須課題だったのである。国民皆兵(無限の兵員供給)や国民意識の形成といった概念は一般にフランス革命以降のナポレオンから始まるが、ピョートル一世は時代の流れや変化を敏感に感じ取り、この時期にして既に様々な改革を行った。それらは全て、ロシアを大国にするための布石であった。軍事を第一に考えると、そのための教育が必要になり、そこでは言語が重要になってくる。このような流れの中で、ロシア語を学問するアカデミーが創設され正書法が制定された。また軍事的必要性から、アカデミーの一部において、日本との来たる接触のための日本語教育が着手された。

この時代、突如として各種教育機関が設立されたことに伴い、印刷・出版に対する需要が急激に高まった。ロシアにおける印刷術は16世紀にロシア最初の印刷物『使徒行伝』が出版され、それ以後少しずつ広まり(藤沼2003)、この時期ペテルブルクやモスクワにはあいついで印刷所が開かれ、暦、文法書、教科書から翻訳文献まで各種の出版にあたった。ロシア最初の新聞『報知(ヴェードモスチ)』が刊行されたのもこの時期(1702年)である。

また、活版印刷を行うためには正書法の制定が必要であった。正書法とは、言語を文字で記述するための共通のルールを言い、それまでの教会スラブ語に倣った記述法ではなく、口語ロシア語を記述するために、装飾的な字体から簡易なものへ変えた。辞書の編纂は自分達の言語を意識して初めて行われるものであり、ゴンザの『新スラブ・日本語辞典』は、ポリカルポフ編(1704)『スラブ・ギリシア・ラテン三か国語辞典』を基準に必要な語彙を抽出、辞書を作成した(村山1985)。ロシア国内におけるロシア語や正書法の安定あつての日本語教育であったと言える。

### 3. まとめと考察—日本人漂着民達が果たした役割—

日本人漂着民達は、当時の日本の国内情勢からすると、非常に稀有な運命に巡り合わせた人々であった。彼らの多くは故郷の地を踏むことなく当地に没した。運よく帰国することが出来た者(大黒屋光太夫ら)は、外国の情報を知る貴重なインフォーマントとなった。外国の情報を知る貴重なインフォーマントという点は日本側

からの視点であるが、ロシアにおいてもまた同様であろう。ロシアは歴史的にヨーロッパ諸国とは古くから交流があった。しかし、東進の過程でコサック達を通じて中央に集められる様々な情報—天然資源の埋蔵地や肥沃な土地、また新たな交易ルートの模索に関する情報等—は常に重要であったし、また、正式な通商関係にない地域—日本も含めて—に関する情報はさらに貴重であったと言えよう。漂着民達からの情報により、日本には豊かな資源(金銀銅錫等)があり、ロシアにはない贅沢品・嗜好品などの存在が明らかになってきたため、ロシアは日本との正式な通商関係を望んでいた。通商関係を結ぶためにも、通訳が必要である。しかし、正式なルートで通訳を雇うことは、通商関係も何もない状態では無理である。こうして、日本人漂着民を有効活用するに至るのである。漂着民たちは、日本に関する情報の貴重なインフォーマントであり、また日本語のインフォーマントとしてロシアで日本語を教えた。しかし、実際に日本語通訳が育ったかどうかは疑問である。B.M.A (1988) には、「日本語教師は母語に関して何ら知識がなく、それゆえ期待される利益は得られない。彼らの生徒たちは一人として和文露訳ができないだけでなく、日本の文字すら知らない」という報告が引用されている。しかし、漂着民が話した方言は、貴重な方言資料として研究対象になっている。つまり、漂着民らは、ロシアでの日本語教育、というより日本語通訳養成事業においては芳しくなかったようだが、日本方言学には貢献したといえよう。

以上のことから、日本人漂着民達の果たした役割を次の3点にまとめることができる。

- ・ロシアに日本の情報(日本語も含めて)をもたらしたインフォーマント
- ・日本にロシアの情報をもたらしたインフォーマント
- ・現在における日本方言研究への資料提供

本稿では、漂着の歴史と彼らの業績を振り返り、またロシアの歴史的経緯に触れて漂着民らの役割をまとめた。今後は、19世紀末からのロシアにおける日本語教育の実情を、日露の外交関係とからめて見てみたい。

#### 【参考・引用文献一覧】

- 生田美智子(1997)『大黒屋光太夫の接吻 異文化コミュニケーションと身体』平凡社  
 井上靖(1991)『おろしや国酔夢譚』徳間文庫  
 ウラジーミル・ミハイロヴィッチ・アルパートフ(B.M.A)著(1988) 下瀬川慧子・山下万里子・堤正典共訳(1992)『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』東海

- 大学出版会  
 ゴンザ編A.I ボグダーノフ指導 日本版村山七郎編(1985)『新スラヴ・日本語辞典 日本版』ナウカ株式会社  
 下瀬川慧子(2005)「ロシアで出版された日本語教育文献」(日本語教育史研究会2005年9月17日慶應大学での資料)  
 杉本つとむ(1999)『杉本つとむ著作選集10 西洋人の日本語研究』八坂書房  
 杉本つとむ(2008)『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史』講談社学術文庫  
 関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク  
 関正昭(2005)「日本語教育史・言語政策史」縫部義憲監修(2005)『講座・日本語教育学 第一巻 文化の理解と言語教育』スリーエーネットワーク pp.190-207  
 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編(1995)『世界歴史大系 ロシア史1. 2.』山川出版社  
 多仁安代(2006)『日本語教育と近代日本』岩田書院  
 藤沼貴他編(2003)『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房  
 I.P.ボンダレンコ 日野貴夫訳「二百年後の試験?!—大黒屋光太夫のロシア語—」『窓』第89号 ナウカ  
 村山七郎(1963)「ロシアの日本語学校について」『早稲田大学図書館紀要』第5号  
 村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館  
 山下恒夫(1994)「磯吉聞き書き記録の出現 大黒屋光太夫調査ノート・1.2.3.5」『窓』第86~90号 ナウカ  
 横手慎二(2005)『現代ロシア政治入門』慶應義塾大学出版会

#### 註

- <sup>1</sup> 都合上、千島・樺太アイヌは日本人としない。  
<sup>2</sup> 自然環境の過酷な冬のカムチャッカの島々では、食料の確保・備蓄にも限界がある。そのため、余分な人間に食べさせる食料はなく、運よく漂着しても、自分達(ロシア人及び現地人)が生き抜くために殺された漂着民も数多いだろう。  
<sup>3</sup> B.M.A (1988)、下瀬川(2005)、村山(1963)も、この段階を一区切りとしてまとめている。1816年に日本語学校が閉鎖され、その後1850年代、プチャーチンの訪日使節団にいたゴシケヴィッチによる日本語研究がされるまで40年間の空白があるからだ。ちなみにロシアで日本語教育が再開されるのは1870年。

<sup>4</sup> ロマノフ朝ロシアは1613年～1917年。ロシア帝国はピョートルの皇帝宣言1721年から1917年まで。

<sup>5</sup> 詳細は2.1

<sup>6</sup> コサックの定義は様々であるが、ここでは、国王がコサックらの自治(自由)を容認するかわりに、正規軍とは全く別の国王直轄部隊を成し、領土拡大の先兵として国境付近や辺境の地の情報収集及びそこでの軍事活動を担った人々を指す。コサックは基本的に巧みな馬術による機動力と武力を備えているため、シベリア等でも広範囲な活動を可能にしていた。

<sup>7</sup> Владимир Васильевич Атласов (1661/1664-1711) シベリアコサック、ロシア人で初めてカムチャッカを探検した。現地人に関する最初の民俗学的報告者、さらには初めて日本人を連れてきた、という栄誉に浴した。

<sup>8</sup> 日本名「三右衛門」だったという説がある。

<sup>9</sup> 当時ゴンザ10歳、ソーザ35歳程度。

<sup>10</sup> 露日語彙集、日本語会話入門、簡略日本文法、有効会話手本集

<sup>11</sup> 竹内徳兵衛自身は漂流中に死亡する。

<sup>12</sup> 最も有名なものとして、井上靖『おろしや国酔夢譚』(後に映画化)がある。

<sup>13</sup> 大黒屋光太夫は、遠距離回船業の船頭かつ船主だった。(当時の回船業においては船頭自身が船主であることが多かった。)また「大黒屋」という屋号を持つことから、光太夫は江戸期の身分制度の中で商人に区分され、かつ中流以上、ブルジョワジーであったことが推測できる。大黒屋は江戸時代以前から続く大商人の家で、光太夫はそこへ養子入りし、千石船の船頭として働いていた。

<sup>14</sup> パラス編 欽定全世界言語比較辞典の日本語部分

<sup>15</sup> この息子、アダム・ラックスマンと共に光太夫らが根室に到着するのは1792年。

<sup>16</sup> 徳川家斉(1773年～1841年)第11代将軍。在位期間1787年～1837年。

<sup>17</sup> 江戸番町の薬草園。現在の小石川植物園か?(山下1994)

<sup>18</sup> 旗本格の待遇だった。(山下1994)

<sup>19</sup> 1751年～1809年。医師及び蘭学者。大黒屋光太夫らから聴取した内容などをもとに地誌『北槎聞略』を著した。

<sup>20</sup> 改宗し、現地の女と結婚した。

<sup>21</sup> 千石船の船主。千石船は当時最も大型の商船である。大型船に目いっぱい商品を積んでいたからこそ、七カ月間もの長期漂流を生き延びることが出来た。

<sup>22</sup> 江戸時代中期以降、船頭は一般に身分は高く、知見や素養もそれなりにそなえていたはず。光太夫がロシアで

付き合った人物達を考慮すると、彼は明らかにロシア上流社会の一員に溶け込んでおり、上流社会に加わってその人々と交流していけるだけの教養の高さや人間的魅力があったと想像できる。

<sup>23</sup> 井上靖『おろしや国酔夢譚』、吉村昭『大黒屋光太夫』にも、教養豊かで人間味あふれる光太夫が描かれている。

<sup>24</sup> 現在のウクライナの首都

<sup>25</sup> 882年頃?～1240年

<sup>26</sup> 雷帝、1530年～1584年

<sup>27</sup> 17世紀、黒テンの売却益は国庫収入の1/3を占めた。

<sup>28</sup> さらに19世紀後半には太平洋に出口を求めていく。つまり中国へ進出する。

<sup>29</sup> 在位1682年～1725年

<sup>30</sup> ロシアで初めて、ピョートル大帝が本格的な徴兵制を始めた。

## Rethinking the initial period of Japanese language education in Russia from the view of Russian politics

Tomo Higashide

This paper makes us rethink the way Japanese-language education actually began in Russia. The history of teaching Japanese in this country dates as far back as the end of the 17th century, when a shipwrecked Japanese sailor named Denbei drifted ashore the east coast of Russia. This event in turn laid the foundations for Russian Japanese language education, which carried on developing into the early 19th century. This paper is a reassessment of the role the shipwrecked Japanese played and it is completely based on the historical background of Russia at that time. We know there were Japanese people who were unfortunately shipwrecked at sea and luckily drifted ashore to the Kamchatka Peninsula and the Kuril Islands. Some of those Japanese, who found themselves stranded in a strange land, were then forced to teach Japanese. Russia made full use of these accidental souls. It came to take an interest in Japan at the end of the 17th century, a time when it had expanded its territory further east and almost reached the Far East, which of course included Japan. As Peter I, the Russian emperor, carried out a variety of reforms in different fields, many kinds of specialists needed to be trained. For this purpose, an Academy of Sciences was founded, and in that academy the organization for the study of Japanese was set up. Thus the shipwrecked came to play a three-fold role: (1) they became informants that brought very valuable information about Japan to Russia, (2) they also provided information about Russia to Japan, (3) their work has become a very important material in the study of Japanese dialects. These 3 points further reinforce our need to rethink the importance of these unlucky Japanese in establishing links in language and culture between Russia and Japan.